

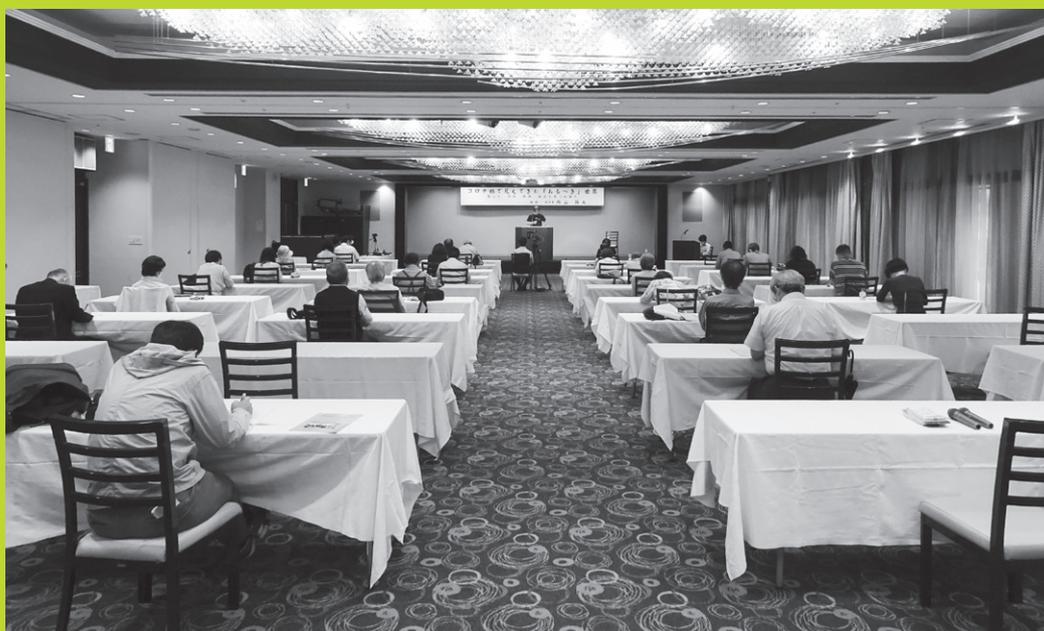
コロナ禍で見えてきた「あるべき」世界

— 暮らし・関係・地域・社会を見つめ直す —

講師：哲学者 内山 節

2020年9月12日(土) 13時30分～

三翠園



公益社団法人 高知県自治研究センター

コロナ禍で見えてきた「あるべき」世界

— 暮らし・関係・地域・社会を見つめ直す —

2020/9/12・高知

1. はじめに

— 現代社会とさまざまな脆弱性

2. 中央集権的政治がもたらす脆弱性について

- 危機対応は地方分権、地域主権でなければ効果的な対応ができないという原則
- 中央の役割は、地方、地域が適切な判断をするために必要な情報と財源の提供
- 中央集権的な危機対応は、対応の遅れや、効果のない対応を生み出す

3. 現代社会とファシズム的基盤

- ナチズムを振り返ってみると
 - …上からの統制社会、下からの統制社会、そのふたつが重なり合って全体主義的社会が生まれていった
 - …怪しげな「専門家」たちと権力による統制
 - …統制をおおるメディアの存在
- コロナの感染拡大のなかで
 - …コロナウイルスの正体、性格などがわからないにもかかわらず、国のスポーツマンのようになって怪しげな情報を流す「専門家」たち
 - …国家による権威づけ、科学の名でおこなわれる権威づけ
 - …「正義」の扇動屋と化したマスコミ
 - …怯えと下からの統制社会
- いつでもファシズムに転じることのできる社会

4. これからの労働の変化について

- テレワークが可能な労働とテレワークが不可能な労働の分断、格差の固定化
- テレワークが可能な労働のふたつの領域
 - …請負労働的な性格が強かった領域…たとえばソフト開発、トレーダー
 - …事務作業を求められていた領域…この分野はテレワーク化がすすめば、次には請負派遣のような契約がすすみ、新しい非正規雇用のかたちが生まれていく

- オフィス労働におけるテレワークが不可能な領域
 - …議論、コミュニケーション、協働などが必要な領域、たとえば新しい企画作りなど
- こうして、少数の「エリート労働」と多数の「縁辺労働」への分裂がますます促進されていく

5. 結びつきを失った暮らしについて

- 「ステイホーム」、「自粛」によって生じた関係の分断
- 個人のなかに閉じこもる社会

6. 現代社会の弱さを克服するために

- 感染防止も経済も私たちの課題ではないという視点・課題はともに暮らす社会の維持
- 政治権力のあり方を再創造する
- 近代社会・フランス革命以来の問題点を検証する
- 地域、地方が全権をもつ社会を構想する

7. 開かれた社会システムを創造するために

- 結集と拡散がつくりだす社会
- 結集の場を失った現実のなかで
- 感染症時代の結集のかたちをみつけだす
- 開かれた医療、開かれた高齢者施設、障害者施設のかたちをみつけだす
- プロ、セミプロ、アマチュアによる協同をどうつくるか

8. 資本主義か新しい協働か

- とともに暮らすことのできる労働体系を創造するために

9. まとめに代えて

- 対立する国際関係のなかで、ファシズム的な統制社会と対決する

コロナ禍で見えてきた「あるべき」世界 — 暮らし・関係・地域・社会を見つめ直す —

2020（令和2）年9月12日（土） 13時30分～
三翠園

哲学者 内山 節氏

（司会）

皆さん、こんにちは。ただいまから高知県自治研究センター主催の内山節先生をお招きしてのセミナーを始めていききたいと思います。私は本日の司会を務めさせていただきます高知県自治研究センターの山崎と申します。よろしくお願いいたします。

さて、本日のセミナーですが、新型コロナウイルス感染防止対策ということで、皆さま方のお席を少し離れた感じで配置させていただいておりますし、そこにカメラがありますが、当センターのセミナーとしては初めてインターネットを使ったライブ配信を行っているところです。会場の皆さまに事前にご了承いただきたいのが、配信をしますので、場合によっては会場の中を映すという場合があるかもしれませんので、その点についてはご了承くださいと思います。

さて、その新型コロナウイルスですが、皆さんご承知のとおり瞬間に世界中に広がって、国内においても非常事態宣言が出されるといったよう

な状態、さらにいまだに収束の見通しも立たない、先が見通せないというような状況の中で、これまでの暮らしや生活、社会のあり方、さらには思考であるとか価値観、そういったものを変えざるを得ない、そういった状況にあるのではないかというふうに思っております。

今日は、標題にもありますようにこれまでの社会、そういったものを見つめ直して、アフターコロナ・ウイズコロナなどさまざまな言われ方をしていますが、これからの暮らし、社会、そういったものがどうあるべきかということについて、哲学者の視点で内山先生からお話をいただくこととなっております。ぜひそういったことを考え合わせる、考えるためのヒントを得られるような、そういったセミナーにしていきたいと考えておりますので、最後までお付き合いのほうよろしくお願いいたします。

それでは早速ですが、講演へ入っていききたいと思います。内山先生、よろしくお願いいたします。



(内山氏)

ご紹介いただきました内山です。高知県には1年に一遍ぐらい、この何年か来ておりますので、顔見知りになった方も何人もいらっしゃいますけれども、今日もよろしくお願ひします。

私は普段ですと、東京と群馬県の上野村という山奥の村に、両方に家がありますので、大体1年間のうち東京に3分の1ぐらいいて、上野村に3分の1ぐらいいて、あといろんな形で全国をほつつき歩いてるといふか、居所不明みたいなときが3分の1ぐらいあって、大体それで1年間過ごしているというのをずっと続けてきたんですけど、今年は2月の下旬ぐらいから地方に行くことがなくなってしまうと、個人的に行つたといふのはあることはあるんですけども、こういう集まつての講演会もほんとに久しぶりといふ感じなんです。9月になって少し始まつたんですけども、3日ぐらい前に長野県で講演会をやりまして、それが計算してみたら7カ月振りでした。ですから、それ以外は行われてもほとんどズームを使った講演会とか、そんな感じになつていて、ほんとに今そんな時代だなといふ感じなんです。

これは個人的なことですけども、上野村の家が100年ぐらい経つてゐる古い家ですので去年ちょっと思い切つて直しておこうかなと思つてお願ひをしたら、予想外に延びまして、1年半経つていて、そろそろ終わりそんな感じのところまで来てゐるんですけども、まだ終わつてないんですね。そのために上野村の家に自分が泊まることができなくなつてしまつて、そういう意味でこの間圧倒的に東京にいてといふ、そういう生活をせざるを得なくなりました。

ただ、僕自身は、このコロナについては不安といふよりも大分怒つてゐます。それは日本の社会といふのは、何かあつたときにこんな対応をするのかといふ、そのことに対して大分怒つてゐます。もちろん政府の対応のまずさとかそういうことにも怒つてゐるんですけども、それだけではなくて、今の極めて統制色の強い社会のあり方といふか、これほんとにこれでいいんですかといふそういう感じがします。この社会こんなに弱かつたのかといふ感じがします。

ウイルスとは

コロナウイルスについては、僕は医学の専門ではありませんので、自分で何か研究してるといふことではありませんけれども、ただ、コロナウイルスといふ RN 系のウイルスといふのは非常に変異しやすいといふ特徴がありますので、恐らく世界には何種類どころか、場合によつたら何百種類ぐらいのコロナウイルスが展開してるといふことだろうといふ気がします。

日本の中で展開しているコロナウイルスもまた1種類ではなくて、人によつては東京型とか何か言つてますけれども、多分いろんなタイプがあります。それはある意味では当たり前といへば当たり前で、ウイルスといふのは生物学上は生物ではないわけで、これ勝手に人間がそう言つてるだけです。別にウイルスが生物だつて構わないんですけども、生物学上は生物ではないといふことです。

じゃなぜ生物じゃないかといふと、生物といふのは自己増殖機能がある。だから、子どもを産むとか卵を産むとか、あるいは種をつけるとか、胞子を飛ばしてもいいですけども、あるいは細胞分裂でもいいんですけど、自分自身で子孫を残すことができる。それを生物といふといふふうには人間のほうは決めてゐるといふことですね。そうすると、ウイルスは自分では増殖能力はありませんので生物ではないといふことになつて、それでウイルスは、このコロナに関していえば猫とか犬にも感染するらしいですけども、多くの場合には人間の細胞の中に入つて、そのことによつて生きることができるといふ増殖することもできます。だから、自分だけでは生きていけない、そういうものがウイルスであるといふことです。

ですから、ウイルスといふのは変異をしながら宿主と共存する方向に行くといふのが普通です。一般的な法則としては、共存するためにはどうしたらいいかといふと、宿主を殺しちゃつたら自分も生きることができなくなつてしまふから、感染力を強めながら毒性を弱めていくといふ

方向で変異するというのが普通なんですね。それに失敗したウイルスというのは、結局宿主を殺してしまうものだから自分も生きることができなくなって、それで気がついたらいつの間にか消えていたというそういう感じです。だから最近でいうと、SARSというウイルスが出てきたときに、あのときにも「日本に入ってきたらどうしよう」なんて話になったんですけども、何だか分からないけど地球上から消えてしまったという、そんな感じですよ。

もちろん消えたといってもどっかでは生きてるかもしれません。もう一度感染力を強めて毒性を弱めて、新型SARSみたいな感じで登場してくるってことはあり得ないわけではないんですけども、一般的にはそうなっていますが、ただ、変異する過程で逆に行っちゃう場合もあります。つまり毒性を強めて、そして感染力を落としてというそういう可能性もあるので、その場合にはみんなが感染するという事はないんだけど、感染した人はひどい目に遭うという格好になるんですけども、そういうものが一時的に発生しないという保証はないです。だからそういう意味で警戒は必要ということにはなるんですけども、一般論でいうと先ほど言ったように、ウイルスというのは自分で生きることができないがゆえに、宿主と共存する方向で変異する。彼らが生き残るためにやれることというのはたった1つしかなくて、自分自身を変えることなんですね。だから、生きていけるように自分自身を変えるという、だからウイルスというのは変異しやすいということです。

そういうので見ていきますと、現在日本で広がっているウイルスについて言うと、僕自身はそんなに心配する必要はないと思っていて、一応今もポケットの中にマスクは入っておりまして、ここはマスクしないとまずいらしいっていうと、マスクを取り出したりやっておりますけれども、ただ、そんなに心配することはないでしょうという気はしています。

ちなみに、インフルエンザで1年間に日本で亡くなってる人というのは、統計的には1,000人ぐらいの年から多かったとして7,000人ぐらい、平



均して3,000人ぐらいが毎年インフルエンザで亡くなっています。ただ、インフルエンザで亡くなりましても、病院が死亡診断書に死因はインフルエンザと書くことはあんまりないんですね。ですから、最終的な結果である肺炎だとか心筋梗塞だとか、死因はそっちになっちゃう可能性があります。ですからインフルエンザが実際には引き金になって亡くなってる人というのはもっと多いと思われていて、大体推定で毎年1万人ぐらいがインフルエンザで亡くなってるんじゃないかと思われています。

それに対して、今コロナで亡くなってる人が1,500人弱ぐらいです。ただ、コロナについては統計の取り方が逆になっていまして、陽性反応が出た人が亡くなると全員コロナの死者になっちゃうんですね。そうすると、確かにコロナにはかかっているんだけど、本当は前から心臓が弱いとか、あるいは肝硬変を持っているとか重い糖尿病であるとか、そういうことで本当の死因がコロナなのか他の病気なのか、分からないというケースが実はたくさんあります。

ただ、統計の取り方で、もし陽性が出たらみんなコロナの診断です。だから1,350人ぐらいコロナで亡くなっていますけれども、恐らく本当のところはその半分以下だろうというふうに考えられます。別に1,000人ならいいとかいうわけではありませんけれども、それなりの用心をしたり注意を払ったり、あるいは他の人々に対して配慮をし

たりとか、それは僕も大事だとは思っていますけれども、何でこんなにパニック的に騒いでいるのかというのは、ほんとにちょっと変だなという感じがしています。

ただ、ヨーロッパで流行った型とか、今アメリカで流行ってる型とか、あるいは今インドで流行ってるタイプとか、そういうのについて言えば、恐らく日本のウイルスとはちょっと違うんでしょうけれども、だから、そのウイルスの性質を見ながら、どんなふうにしていったらいいのかわかっていうのを見ていかないと、ほんとはいけないんだろうという気がします。

今経済か感染防止かと、テレビつければそんなこと言ってますけれども、僕から見ていくと、ちょっと誤解されやすいような言い方ですけども、どちらも我々の課題ではないという気がします。なぜかという、感染症というのは感染防止というのは原則的にはできないんですね。つまりどんな方法を使っても広がるときには広がってしまう。ゆっくり広がるか急速に広がるかの違いと言ってもいいです。

世界の中ではスウェーデンが感染防止、実はあそここの国、結構やってるんですけども、ただ、街中の規制をしない。だから、やっぱり大きな人数で集まるのを規制したりとか、あと高齢者施設的なところに一般の人が立ち入るのを禁止したりと



か、いろんなことをやってはいるんですけども、日常生活としてはマスクをつけなさいとか、そういうことを全くしてない。そういうことなのでスウェーデンというのは集団免疫ができるのを待つという政策だと一般的に言われてるんですけど、スウェーデン政府自体の発表は、私たちは集団免疫を目指しているわけではないと、どのようなことをしても結果は同じなんだと言ってます。

コロナとのつきあい方 ～抑え込みではなく共存

だから、もしロックダウンなんか厳格にできれば、もう全員が閉じこもっちゃうわけですから確かに感染は止まる。だけどロックダウンを10年間続けることはできないので、ひと月も経てば当然ながらまた人々が動き出す。そしたらまた感染が広がる。つまり感染症というのはそういう性格のものなので、ただあまりにも急速に爆発的に感染が拡大してるときには、やはりロックダウンするかどうかは別として、そういうような規制を加えて感染スピードを遅らせないと病院とかがパンクしちゃいます。ですからその調整をするためにどうしたらいいかということはあるんだけど、何かコロナとの戦争とかコロナが収束したらとか、盛んに言う人たちがいるけれど、そんなことないですよ。つまりはっきり言ってしまうと収束しませんという、そういう性格のものです。だからコロナ菌のほうも私たちと共存する方向で間違いなく変異すると思いますので、私たちのほうも共存できる方向で自分たちのあり方を変異させるということしか本来は手がないと思います。

実際にもう今世界では、このコロナについておそらく何千本ぐらいの論文が発表されていて、そういう中で例えばロックダウンに効果があったのかどうかというの、もうはっきり言ってしまうと分からないっていう感じなんです。確かに爆発的感染を抑えていくのに、人間と人間が接触しなければ抑えられるだろうということは言えるんですけども、しかし実際にはロックダウンした国々というのはその後感染者が増え続けて、2カ

月ぐらい経ってようやく減少というそんな感じですし、今度ロックダウン解除してしまうと、今のフランスなんかもそうですけども大体1日に10万人ぐらい感染者が出ています。だから、その点でいうとスウェーデンが言ったように、いや、どういう方法をとったって同じなんですという、むしろそっちに近いっていいですか。

ですから、これを人為的にうまくやっというということになると2つしか方法がないわけです。1つはやはり爆発的な感染は防いで、それで共存できるような生活の仕方というのを考えていくという方法です。それからもう一つは今期待されているワクチンです。ワクチンができれば、ワクチンというのは疑似的に感染したような状態にするわけですから、有効なはずということですね。

ただ、ワクチン開発というのは非常に難しく、今までワクチンができて感染症が終了したのは天然痘しかないですね。SARS、MERSについてもまた出てくる可能性あるし、MERSのほうはまだ中東では若干出ています。ですから、ワクチン開発はやってるんですけども未だに成功しないているんですね。効果のあるワクチンで安全性の高いワクチンの開発というのは実に大変です。だからワクチンの歴史というのは常識的にいうと、つくっては失敗し、つくっては失敗しを繰り返しながらようやくという、100万人にワクチン打って1人2人が重症になってもやっぱりこれ使うわけにいきません。だからワクチンというのは性格上100万人に打ったら少なくとも100万人が安全であるという、そういうものでなければ打てませんし、そしてまた効果がなければいけないしと。副作用が出てこないようなワクチンをつくっていくと、効果のないワクチンになってしまって、これ全然効きませんというそういう話が出てきちゃったり、逆に効果のあるようなものをつくると副作用が出てきちゃったり、そういうんでもう失敗の繰り返しになっていくのが普通なんです。だからうまくいっても、本来からいうと10年ぐらいかかるんです。

実際インフルエンザワクチンが前からあるわけですが、インフルエンザワクチンを打ってもインフルエンザにかからないわけじゃなくて、

むしろ一生懸命ワクチン打ちに行く人に限ってインフルエンザになっているみたいな、自分の周りなんかそうですけども、そんなこともよくあります。ですから最近はお医者さんも、「インフルエンザワクチンはインフルエンザにかからないためのワクチンではなくて、かかったとき重症化しないためのワクチンです」みたいな言い方をしています。そのあたりも人間の体質が一人一人違いますので、やはりいろんな病気を持ってる方もいればピンピンしてる方もいるわけで、ほんとに重症化しないのかどうかというのもよく分からないんです。

今遺伝子分析なんか簡単にできますので、だから試作品をつくるのは簡単なんです。昔は遺伝子がよく分からないから、ほんとに経験だけでつくっていくみたいな時代があったんですけど、今は例えばコロナウイルスの遺伝子がどうなっているかとか、そんなの簡単に分かります。そうすると、じゃあこういうものをつくれればできるねなんというのは、設計図的にはすぐできます。だから今度も夏ぐらいにはいろんなところが、うちはつくれますみたいなことを発表するんでしょうけど実際にそれをつくってみて、先ほど言ったように効果と安全性が保証できるのかという話になると、よほどの幸運なことがない限り、はっきり言うと僕が今日の帰り道で宝くじを買って帰ったら1等賞が当たっていたというぐらいの幸運がないと、多分年内だとか来年早々だとかに間に合うようなワクチンは出てこないと考えるほうが普通です。

ですから、何かこう私たちは不都合なものができてくると抑え込もう抑え込もうとするんですけど、抑え込みによって成功することはないです。それは今の国際関係だってそうですけども、確かに日本の周りにはちょっとありがたくない国々があります。だけど、じゃあその国とどうつきあっていくのかっていうときに、徹底的に抑え込めばいいじゃないかという論法というのは必ずしも正しくないわけで、むしろ不都合な国があるんだけども、その国ともどういう方法を使ったら共存できるかという、つまり爆発的な対立になったり暴発したりすることなく、どうやったらうまく一緒にいけるかという、それを考えていくのが人間

の知恵であって、抑え込めばいいという発想は本来からいうとおかしいんです。

だから、それはコロナについても言えるわけで、何か抑え込んでしまおうという発想はほんとは正しくないわけで、向こうも生き物ですから生き物同士どうやったら共存できるかということをもしる考えるべきなんです。ただ、この間の日本だけではなくて世界の論調を見ている、何かコロナを抑え込むとか収束させるとか、そして経済をまた軌道に乗せるとか言っているんだけど、実際今私たちにとって必要なことは、どうやって共存しながらこの社会を維持するかというそっちのほうはずっと重要です。そうすると社会を維持するためにはやっぱり爆発的に感染するのはまずいわけで、毎日10万人も感染者が出るみたいなことになっちゃえば、これは社会維持自体が困難になるし、もちろん病院もパンクしてしまうとか、いろんな問題が発生します。ですから爆発的感染を抑えて、少なくとも緩やかな感染で抑えておくというその努力は必要なんだけど、それは感染防止のために必要じゃなくて、この社会をみんなして維持するためにそういうこともちゃんと考えないとまずいよねという、むしろそういう問題だというふうに思ったほうがいいです。

それから、経済というのは私たちの社会を維持するための手段なので、経済を目的にしてはいけないということです。ですから、この社会をどうやって維持していくのか、社会を維持するためにはどうしても社会活動をみんなが担っていかないと社会が維持できないということです。その社会活動ができるようにするにはどうしたらいいとか、それを考えていく必要性はあります。そうすると、それは結果としてはある程度経済を動かすということになっていくんですけど、それはあくまで社会を維持するために人間たちの社会活動をどういうふうに動かしたらいいかという、それが目的なのであって、その結果、経済が動くというのは結果に過ぎないという。だから、経済だけを念頭に置いてそのためにこうしようあしようというのは、僕は発想の間違いだという気がします。

ですから、感染防止も経済を動かすことも目的

ではないと。我々にとって大事なことは、この社会をみんなしてどうやって維持するかという、そのことが大事であって、それは結果としてはある程度の感染防止をせざるを得ないし、ある程度、結果としては経済も動いていくという、そういうことなんだろうという気がします。

危機対応は地域主権で ～地域と中央の役割見直し

僕は先ほど言ったように、やむを得ずこの間東京にいたことが多かったんですけども、僕の東京の家の周辺でもほんとに皆さんとってもよく政府や東京都の言うことを聞いていて、何時までとか言われるとちゃんとやってるし、道歩いていてもマスクをつけてない人はほとんどいない、ゼロに近いですし、僕自身はオープンな場所で人が余り混んでないところで何でマスクつけなきゃいけないのかよく分からないので、道歩いてるときなんか大抵マスクせずに歩いています。ただ、交差点なんかで人が集まってくるような場所になると一応マスク出してくるみたいな、そんなようなことをよくやりますけども、ほんとに皆さんよく言うこと聞くんだなという、そういうまちが今東京でも展開してるという感じです。

はっきり言ってしまいますと、阪神・淡路の震災とかあるいは東日本大震災とか、そういうことを経験しながら私たちがつかんだ教訓というのは、とにかく危機になったら地域主権がしっかりしてなければいけないという、あるいは地方分権がしっかりしてなければいけないという。つまり危機って言いながら、危機の内容というのは県によっても違うし、県の中だって大変違うわけですね。例えば高知県で地震が起きたと言っても、室戸岬に近いほうで起きたのか、逆に宿毛のほうに近いところで起きたのかによって、高知県なんてこれだけ横に長いですから被害状況も違ってきます。そしたら、当然ながらそれをどうしたらいいかというのを高知県で決めるのではなくて、室戸のほうは室戸で決めるし、宿毛のほうは宿毛で決めるし、そういうことをやっぱりきちっとできる

仕組みをつくっておかないと被害が大きくなります。

ましてや、高知県だったら、高知の方は全体の地図が頭に入ってますからまだいいですけど、それを東京のほうで決めてしまったら、何とも言えないことになってしまうということです。実際には、あの東日本大震災のときにもそうでしたけれども、市町村が独自に動く力がない、あるいは独自に方針出せない、それで市町村は県の方針の決定を待ってる、県のほうは国の決定を待っているという、もうそういうところがたくさん出てしまって、その結果として被災者がますます深刻な状況に陥ってしまうというのが、東日本大震災のときにもよくありました。

やはり危機になったときには、自分たちの地域は自分たちで守るといふような、そういうことができる行政なり住民なりがないと苦しいです。実際にははっきり言ってしまいますと、東日本大震災で危機を広げた原因の1つは、合併した市町村が多すぎたことです。つまり合併市町村のために市が大きくなりすぎていて、そしてしかも旧来の中には旧何とか町とか何とか市とかがありますから、それを全部を束ねながら上手に方針出せる、そういう市町村行政がほとんど壊れていたっていう、中には平成の大合併に反対をした町村とかもちろんあって、そういうところはわりかし動けたんですけども、合併したところはほんとは対策

が遅れてしまったという、そんなことがよくありました。

ですから、今の合併後の市町村の形でほんとはいいのかどうかというのも、ほんとは問い直さなきゃいけないんですけども、ともかくはっきり言えることは、危機になったら地域地域で方針を決めるという、それが何よりも大事ということです。

それで、中央は何をするのかと言ったら、地方にどんどん自分たちで決定ができるように情報をどんどん提供する。今度のコロナなんかですと、コロナが広がり始めてもコロナ菌の性格とかほんとは分らなかったわけですね。世界ではどんどん研究が発表されてますけど、特に論文記事を見ますと大半は英語で発表されてますから、それを全部市町村が拾って、それを市町村長さんが読んで方針決めるなんていうのは大抵は至難の業です。しかもその本数は多いですから、世界でどういう研究が出ているのか、概要だけでもいいから中央が日本語に直して、それで判断できるように市町村にどんどん流すとか、そういうようなことをほんとはしなきゃいけないと思います。

さらには、市町村でこうしようと決めた場合には、それは財源が必要という場合がよくあるわけです。そしたらその財源は国のほうで保証するからどうぞ自由にやってくださいという、むしろそういう、情報と財源の提供こそが国の役割であって、国が方針を出すことではないという、そのこ



とも東日本大震災の教訓から、結局国は何も学んでこなかったということが分かってきたし、それから県や市町村も学んでないというですね、これは非常に危機に弱い社会をつくってしまったという感じがいたします。

ですから、みんな気がついたように突然あの総理大臣が全国の学校休校とかいうのを発表して、だけど何で全国を一斉にやらなきゃいけないのかというのは、ほんとみんな考えてみたらおかしいなと思ったはずなんですよね。自分たちの地域に感染者が出てるといふならまだしも、全然感染者が出てないような過疎地域でも全て休校にしなければいけないという、その点でも実におかしいです。さらに言ってしまうと、学校を休校にするかどうかというのは教育委員会の権限であって、学校と教育委員会が相談をして、ちょっと感染者出てきたからしばらく休校にしようとかかですね、つまりインフルエンザのときの学級閉鎖みたいなものだと思います。それをインフルエンザが少し出てきたら国が全国一斉に休校を命令するって、これ本来からいうと教育の独立を侵す行為なんですよ。

だから、国がいろんな情報提供の過程で、これは休校にしたほうがどうも良さそうだという情報を提供し、それで各地の教育委員会と学校に判断してもらおうということだったらいんですけども、本来日本は戦前の国家主義的な教育の反省に立って、戦後は教育というのは独立機関であると、行政が介入しちゃいけないんだという建前でいったはずなんです。だから戦後初期は教育委員も選挙制度



で行われていってる。それがいつの間にか教育委員の公選制が取り上げられて、そしていつの間にか教育委員会が文科省の下請機関みたいになって、さらに今回総理大臣が命令をして学校を止めるという、これはほんとにこの間の教訓どころか、戦中を経て戦後行った教訓を全て忘れてしまったのかという、そういう気がするぐらいのもう暴挙としか言いようがないです。しかしそれが大した批判も浴びずに成立していく私たちの社会って何だろうかという、そういう気もいたします。

その上に極めつけはアベノマスクで、私のところにも2カ月ぐらい遅れて来ましたが、あのちいちゃな使いにくそうなマスク、うちはまだ使っていないのでどっかに転がってるんじゃないかという気がしますが、それだってマスクがなくて困ってる人たちもいれば、別に今マスクでそんなに慌てなくもいいんじゃないのという地域もあるわけで、それで何で総理大臣がああいう決定をするのかというの、ほんとに何だろうなという感じがいたします。

だから、結局そういう中で地域主権ができていないがゆえに、中央集権的な対応策が出されて、中央でできるとしたらせいぜい国境対策ぐらいなんですよね。つまり一度出入国を止めるとか、それからあるいは入ってくる人たちを全員PCR検査かけるとか、そういうようなのは市町村の仕事というよりも国の仕事になるでしょうけど、だけど、自分たちの社会をどう維持していくのかは市町村が考えればいいのか、あるいは県が考えればいいのかであって、それを考えられるように、先ほど言ったように情報を提供して、そして必要ならば財源も出しますよという、そういうことのほうが正しいと思います。

だからGo To トラベルも、多少旅館はそれで客が何人か来たかもしれないけども、この社会を持続的に維持する政策としてはあまりにも効果のないことをやっていて、ほんとにあんなことするぐらいだったら、かつて民主党政権時代にやったように高速道路を無料化でもしたほうがいいっていいですか、やろうとしたようにとすべきですけども、そうしたら東京の人間なんて高速道路が無料だったら結構歩きますので、そのほうがず

っと効果があると思います。もっと言ってしまうと高速道路を無料化して、それで長距離電車の代金と飛行機代金を半額にするとか、そうすればずっと人々はじゃあ動こうかという気分になるでしょう。

それだったら、補償しなければいけない場所が限定されちゃいますから、高速道路公団とかJRとか、あるいは航空会社とか、そこだけ補償すればいいわけですから、あんな電通がかんで動くようなこととかあんなことしないでいいんです。だからそういうことのほうがまだずっとましなぐらいで、それも中央が実権を持って国を統制しようとするからおかしな政策が次々に続くんですね、それで先ほどから言ってるように、危機対応は地方分権でやるべきというその大原則を無視してるということです。

専門家のあり方 ～専門家の怪しさ

だけど、そういうことに対して、マスコミも含めてですけども批判、反論が出てくるのかと思っていたらそうではなくて、何かそのお先棒を担ぐように、ステイホームと言われればステイホーム頑張りましょうという話ばかりが出てきちゃって、そしてまたみんながそれに従って行って、それでちょっと従わないような雰囲気の人がいると、何かみんなが下から統制をかけるみたいな雰囲気が出てきて、そういう雰囲気見ると、何だこれ、コロナファシズムじゃないかっていう気がしてきます。

それでファシズムというのは、例えばナチズムのときでもそうですけど、上からの統制がかかりながら、実はそれに呼応する形で下からの統制が動いた。だから上からと下からの統制が両方共鳴するような感じで、そしてあの統制社会ができあがっていきってというのがファシズムの形ですよ。そして今日本て、疑似ファシズム的な状況にコロナで一遍に陥った。だから、そういうものに対してこんなに脆弱だったんだっていうのがほんとに感じざるを得ないです。

さらにナチズムのときもそうなんですけど、例えばユダヤ人とかロマ族ですよ、ジプシーといってもいいですけども、その人たちの大量虐殺をしたときに虐殺するのが正しいことなんだということを説明したのは、むしろ当時の科学者たちなんです。つまりみんなが変だなと思っているのに、ナチスが上から暴力的にみんなを殺したというわけでもないんです。もちろん暴力的に殺したんですけど、しかしそれを正当化した科学者たちがいたということです。

実際にはその科学者たちの中には、いろんな治療の人体実験をしたかったという人たちがいて、特にあの頃、今でいうと脳外科的な脳の手術ですけども、そういうことができ始めた頃ですよ。ですから、それを使っているような病気を治したいという、特に若い医者たちがいて、最初にあったのはてんかんは脳手術によって治せるみたいなそんな話があって、そうすると動物実験ではやれても、やっぱりほんとにやれるかどうかを確認していきくとすると人間でやらなきゃいけないわけですね。

そのときに、社会に役に立たないどころか害毒を与えてるユダヤ人とかロマ族を、その人たちを人体実験に使うと。そのことによっていろんな治療法が確立されれば、こっちのほうはずっと歴史上のプラスになるんだというそういう論拠なんですけども、そういう意味で医学関係者が大挙してナチスに入党をして、そしてナチスに人体実験ができる体制をつくるように要請し、それに応えながらだんだんホロコーストへと向かっていくというですね、だからあんなにたくさん殺せと言ったわけじゃないんですけど、あのきっかけをつくっていったのは、それが人類の進歩であり、科学の発展だというそういう医学者たちの対応でもあったわけですね。

また、それは医学関係者だけじゃなくて実にいろんな専門家たちが科学的あるいは論理的・合理的と称して、ナチスの政策を正しい政策だというふうに裏付けていくっていいですか、そういう専門家たちが大量に存在をしたという、だから怪しげな専門家たちによって、あのファシズム体制は支えられたという一面を持ってるし、さらにはそ

れをあおっていったマスコミとかそういう、当時はテレビはありませんけれどもメディアの存在というようなもの全部が共鳴し合って、ナチスドイツができあがっていくというふうにも思っています。そうすると今の状況何かそっくりじゃないかという気がしています。まず最初の頃よくテレビに出てきた専門家会議のメンバーという、あの怪しい専門家は何なんだというですね。

僕はなぜ怪しい専門家っていうかという、まず専門家の役割というのは、政府に注文をつけることなんですね。だからあのときには、まだ最初の頃にはよく分かりませんから、だから早く水際対策ですけども国境封鎖やったほうがいいよとか、それからPCR検査をもっと簡単にできるように早く整備しなさいとか、PCR検査ができないというのは、厚生労働省、保健所ラインがその権限を握って離さなかったというのが一番大きい理由ですから、そしたらこのライン一掃崩しなさいとか、民間でどんどんできるようにしなさいとか、あるいは今民間でできないわけでもないけれども検査費がすごく高いですね。

それで今ほんとに不思議な状況です。例えば僕が今回やってきてはおりませんけれども、例えば高知に行くのに、万が一僕が感染していて皆さんにコロナ菌ばらまいていくということになるとまずいかなと考えると、それで「自費で調べてください」と言った場合ですね、今東京ですと簡単に調べられます。検査時間は次の日ぐらいにならないと検査結果は出てきませんが、どんどんいろんなところが受け付けています。ところが、僕が仮に発熱して、「ひょっとしたらコロナの可能性があるので検査してください」と言うと、なかなか簡単にいかないんですね。

何でこんなことが起きるのかというと、コロナの可能性があるので検査してくれっていうと、これは治療行為になって健康保険で該当します。それで今その検査費用は国が持ってるから無料ということになります。このやり方するとお医者さんは儲からないんですね。ところが、「私、高知に行くから念のために調べてよ」とこう言いますと、これは自由診療になるもんだから、検査費いくらにするか医者が勝手に決められるんですね。だから

今一番安いところで2万5,000円ぐらいで、一番高いところ5万円ぐらい取ってます。だから、こっちは儲かるわけです。当然ながら1人3万円でも10人やれば1日30万円ですから、ほんと坊主丸儲けに近いです。だから、「どうしても今海外に出張で行かざるを得ないから調べてほしい」とか、そういう人たちはどんどんできて、それで実際に「発熱したので診てください」という感じで行くと、未だに手間取っているという、こういう体制のあり方はやはり何とかしないとだめでしょうとか。

つまりそういう専門家であるならば、何がネックになってこういうことになってるのかが、僕らよりも分かるはずですから、そのところでいろんな改良を政府に要求するという、専門家というのは本来それが仕事です。ところがあのときの専門家はどうかということ、その政策についてはもうはっきり言ってしまうと厚生労働省のスポークスマンと化して、つまり大体国の委員というのは、政府のイエスマンみたいな人が集まってくるという傾向ではありますけども、それにしてもその度合いがひどすぎます。ですから国に対して何の注文もつけずに国の政策に従う。それで今度はテレビに出てきたりして国民を脅すという、それでこれ何やってるのっていう、だからその点で実に怪しい専門家。だからやってること逆でしょうっていう感じがします。

さらに言ってしまうと、専門家というのは、大抵のことについて今までの自分の研究ではこういうことが言えるけれども、その自分の言ってることに、もしかしたらこういう弱点があるかもしれないということを知ってるのが専門家なんですね。つまりその分野を深く研究していると、自分の言っていることが100%正しいという自信は持っていないのが当たり前で、今こういうふうに見えるけれど、もしかするとこういう問題が背後にあるかもしれないとか、自分の論理にこういう欠陥があるかもしれないという、その辺についても見えていて、それでその辺を視野に入れながら発言する。そういうのが専門家であります。

だから専門家というのは100%断言できるものを持ってわけじゃなくて、特に今回のコロナに

なりますと、最初の頃はほんとに何も分からなかった。ですから、専門家だって分からないことだらけの中で、だからせいぜい言うとするれば現状では何にも分かりませんと。分からないんだけど、とりあえずみんなして感染を少し抑えましょうと、だから思いつくことはみんな試しにやってみましょうと、だから効果があるかどうか分からないけども、とりあえずみんなマスクしてみましようとか、ソーシャルディスタンスしっかりやってみましようとか、それでそういうものが効果があるかどうかは、とりあえずやりながら検証しましょうという、例えばそういうことだったら正しいんですね。

だけど、それをすればこうなるみたいなことを断言してくるということになると、それはもう怪しい専門家としか言いようがないです。それでその極めつきは8割おじさんですけども、あの人が登場して、「8割接触を断たなかったら42万人死ぬ」と言ったんだけど、死ななかった責任をとってもらわなくてもいいですけども、実に怪しい人です。実際にはあの8割おじさんが根拠にしたのはドイツの1論文なんですよ。ドイツの1論文の中に、感染した人が1人が何人に感染させるかっていう、その1つの論文の数値です。それが一番感染力の高い数値なんですけど、それを使っただけなんです。けど実際には、その論文自体が当のドイツでも、これはずさんだっというので否定されているようなものです。しかも未だに、はっきり言うとコロナの感染の仕方がよく分からないんですね。

だから、発病してしばらくと発病直前ぐらいが移しやすいという、そういうように言われているんだけど、実際には症状が出てこないときには感染させてないんじゃないかという研究論文もあって、つまり人にどんどん移すのか移さないのかというのが、ひょっとしたら個人差に過ぎないんじゃないかとか、つまり安定したデータが出てこない。つまり感染したら、その人に接触した人がみんな感染していくというデータも出てこないし、発症する直前に感染力が最大になるというデータも実ははっきり出てこない。だから依然として謎のようなウイルスなわけですね。



だから先ほど言ったようによく分かりませんから、みんなしてできることは試してみましよう。それでちょっと爆発的な感染だけはみんなして阻止してみましようっていう、それぐらいに考えとくのがいいわけで、それが何か結論が見えてるように言ってくるのは、ほんとに怪しいですねという感じです。だから、そういう点では今回、怪しげな専門家が跋扈する社会をつくってしまい、しかもそのことによって国の政策が何か裏づけを持っているかのごとく、そういうことになっていってしまう。

それから僕なんか仕事柄、何か発生すると、僕はこれに対してどう考えるかっていう、自分流の考え方ってことですけど、どうしてもそれができないとちょっと落ち着きが悪いです。最初的时候はほんとに、僕、落ち着き悪くって、武漢で爆発的な感染が起きたというあのニュース見ていても、これに対して僕はどう考えを提示できるかっていうのがなかなかまとまらない。だからそうするとちょっと落ち着きが悪くて、だから早く落ち着かせなきゃいけないので、あの頃から一生懸命取れるような情報を取っていました。

ただ、当時はまだそんなに情報もなかったですから、結果としてはよくテレビを見ていました。そしたらもうあきれてしまったのは、例えばステイホームとかいう言葉ができてきたときもそうですけども、「ステイホームしましょう。これは命の問題です」とか、テレビのキャスターなんか絶呼するんですよ。それでテレビのキャス

ターは、正しいことを国民に早く伝えなければという気持ちでやってるんでしょけども、この形というのはファシズムと同じです。それだったら第二次大戦のときには、あのときの日本では大東亜共栄圏をつくるということは正しいことですから、「大東亜共栄圏のために命を捨てても頑張りましょう」という絶呼があっても、当時の社会では、多分言ってる人は正しいことを言っていることになる。結局それと全く同じ構図で、それでステイホームです、命の問題ですみたいな、そういうようなことをテレビでアナウンサーからキャスターまでが絶呼するという、これほんとにファシズムだなというそういう感じです。だから我々の社会というのはこんな社会だったのかというですね。一応戦後のいろんな歴史があるので、もうちょっとはましかと思ったのという、僕としてはそんな感想です、それで少々怒ってるというそういう感じです。

科学的基準による正当化 ～基準が変われば判断も変わる

もともと何かの論拠というのは、それが正しいか正しくないかというのは、実は科学的に証明とかいうのは非常に難しい問題なんですね。それで科学というのは、その1つの科学的基準でものを判断していく方式ですから、基準が違ったら全く違っちゃうわけですね。だから、例えばさっき言ったようにウイルスは生物ではないと。これは生物学の基準でいうとそうであるという、だけどウイルスだってちゃんと立派に生きていて、そしてやってるわけですから、ウイルスは生物でしょうって見方をしたって一向に構わないわけですね。ただ、今の生物学の基準で見れば、ウイルスは自己増殖機能がないから、だから生物ではありませんという、そういうことになってしまうというだけです。

だから、全て科学というのは1つの約束された基準があって、その基準に基づいてものを見ていくということに過ぎないということですね。例えば、今貯金しといてもお金ちっとも増えない時代

だから、貯金じゃなくて投資をしましょうというようなことを盛んにいろんな証券会社とか銀行とか、今はこう言ってます。もちろん投資をすればリスクもありますから、増やすつもりが減ってしまったという可能性も当然起きますけれども、ただ、そこでもお金を増やすことがいいことだという基準があるわけですね。そこに対して、「お金を増やすことにエネルギー使うのが、本当に私たち幸せにする方法なの？」みたいな疑問符を出されちゃえば、この構図は一気に崩れるわけです。

だから、幸せというのはもっといろんな基準があるんじゃないのと言われた瞬間に、お金を増やしましょう、もっと豊かになりましょうみたいな話というのは一瞬にして崩れる構図です。だけどそのお金を増やすということだけで言えば、今銀行に1万円預けて1年に1円利息がつかないぐらいの話ですから、そこだけとればもうちょっと利回りのいいものに回しておけば、1円ではなくて10円になりますよという話はある得ないではない。だけど、これもまたそこでこの基準で見てるかなわけですけど、1円が10円になるとすると10倍利回りがいいというふうに見るべきなのか、それとも1円も10円もほとんど変わりませんねというそういう見方をすべきなのか。これ基準変えた瞬間に、また逆の判断になるということです。

科学というのは実にそういうことをしているというふうに思っていて、科学の基準でものを見れば、こういうふうに見えるんですよということです。ただ、その科学的な裏づけがあるということに1つの権威を持たせることによって、この社会が成立しているということは確かなんですね。だから、これもテレビなんか見ておきますと、キャスターからコメンテーターからアナウンサーからみんな、科学に基づいて対策を打たなければいけないとか、最近流行っていたのは、エビデンスをしっかりさせてそれという。

エビデンスという言葉は一部では数年前から流行ってましたけど、一般の人たちからすると、急にエビデンス、エビデンスという言葉が聞かされるようになったという感じじゃないかと思うんですけど、そういう証明を持ってやらなければいけないというか、そんなようなことが盛んに言われ

ます。だけど、それもまた実に不可解な発言で、なぜかという、今でさえそうですけども、その4月とか5月とかいう段階ですと何の科学的データもないんですね。科学的データがないということは、エビデンスなんかありようがないわけです。

ともかく武漢でえらいことになったとか、その後、アメリカで爆発的に感染拡大したとか、それでヨーロッパでも大変な事態に陥ったとか、そういうようなことが分かってるぐらいで、何ら科学的データも何もありません。そういう状況の中で科学的な対策を打たなきゃいけないとか、エビデンスのある政策をやらなきゃいけないとかいうと、何か高尚なことを言ってる気になるそのキャスターとかアナウンサーとかコメンテーターとかもうたくさんいたんだけど、皆さん、エビデンスも科学もない世界ですよ、今っていう。だから、これがもうあと何年か経ってくれば、ある程度の科学的だと称するデータが出てくるでしょうから、そしたらそういう議論もいいとして、現状では何もありません。

だから、本当に科学者であるならば、現状では科学的データもありませんし、エビデンスもありません。だから我々お手上げですという、だけど、お手上げだと言ってるうちに死者が累々では困りますから、だから思いつくことはみんなでやってみましょうという、そういうぐらいが正しいんです。それがそういうふうな科学とかいう名によって何か権威づけられて、何か正当化されていくって、この形もまたファシズムの時代と変わらないという感じがしてきます。それとさっき言ったように正義を絶呼して扇動するマスコミという、これもまたファシズムじゃないかとか言いようがないです。そういう中でみんな怯えていて、それで今度は下からの統制がかかってくるみたいな、そんな感じです。

つまりそういうのを見ていると、この社会はいつでもファシズムになることができるんだという、そのことを今回逆に認識させられた。だからさっきから言ってるように、もうちょっと抵抗力のある社会かと思ったら、こんな簡単にコロナファシズムになるのかという、むしろそういうことのほうがコロナ以上に恐ろしいことです。

テレワークの落とし穴 ～結びつきの上に成り立つ社会

それから、高知県でもある程度広がったかもしれませんが、東京なんかではいわゆるテレワークというやり方が相当広がったことは確かです。確かにテレワークというのやってみますと、出勤しなくていいわけですから、特に東京なんかですと、満員電車で1時間も1時間半もかけて出勤してる人というのが結構いたりしますから、その人からすると、家で仕事ができるというのはとても良かった。それでこういう形これからも維持したいという、そういうふうにした人というのが結構たくさんいたという感じです。

だけど実はこれ、かなりおっかないやり方だということも気がついていないといけません。なぜかという、テレワーク化すればするほど1人1人がその企業とのいけば請負契約化することなんですね。だから、この仕事をやってくださいというそれを請け負ってやる。そうすると請け負いですからどこでやってもいいわけで、自分の家でやってもいいし、つまり期日までにそれが終わってればよいということですね。

これは例えば僕は基本的には原稿書いたり本書いたり仕事の間ですけど、出版業界でいうと、請負的な仕事というのはものすごく前から広がってるんですね。例えば印刷物になる前に、文



字を細かくチェックし、間違いを正す校閲をする人がいる。社内で校閲の部署を持ってたりするのは今はほんとに少なくなってきた、ほとんど外部校正者に発注するような格好になってるんですね。それどころか最近では、前からそうなんですけど、編集作業自体が外部に発注されるというケースもたくさんあります。だからフリー編集者とかあるいは数人で編集プロダクションをつくってる会社というのはいっぱいあって、そこが企画を請け負って編集作業をすることも普通に行われているという状況なわけです。そういう中で、書き手もまた発注を受けて原稿を出すというそんな感じになりますから、これも請け負いみたいな感じになります。そうすると出版業界というのは前からもういろんな部署が請負化してる一面があるわけですね。

そうするとそれは何を生んだのかという、いろんな部署の人たちがだんだんだんだん発注する価格を下げられて、それで生活ができなくなっていくとか、あるいはそれを補おうとすると超長時間労働によって補っていくという、そういうことが至るところでは発生をしているということなんです。ですから、書き手でもそうですけれども、ちょっと言葉として変なんですけど、作家といわれる人たちとライターといわれる人たちがい

て、そのライターといわれる人たちはもう完全に使い捨て化しています。その原稿料は信じられないぐらい安いんです。

それで作家といわれる人たちは、それと比べたらまだまだしな待遇を受けているという形にはなるわけなんですけど、ただ、実際には作家といわれる人たちだって発注が来なくなってしまえば、そのまま事実上の倒産状態というか失業状態になっていくわけです。ですから、全員が不安定雇用化しています。そういうことが実際には出版業界でもほんとに進行してるというのが今の状況でもあるんです。

つまり仕事を請け負うということは、次には請け負いの単価の切り下げとか、それから請負業者、請け負いをする人たち同士の競争とか、そういうのが激しくなっていくというのが、これはもう一般的な法則です。だからテレワークなんかやっていきますと、さっき言ったようにまず1人1人の従業員がある業務を請け負うような形になっていて、そうすると、請け負わせたんだけどミスが多いとか、能率が悪いとか、出来が悪いとかいうことになってくれば、これはもうあの人辞めてもらったほうがいいという話にすぐなります。だから雇用契約上、すぐ辞めさせられることができるかどうかはともかくとして、方向としてはそうい



う感じで、ときにはみんなしていびり出してしま
うという、そういうようなことももう既に起き始
めています。

だから、そこで問題になるのは、1人1人の仕
事になっちゃうってことなんですね。会社に出勤
してきて仕事してたら、例えば何かやってちょ
っとしたミスが起きて、誰かがちょっと気がつ
いてカバーしてくれるとか、それからちょっと分
からないことがあっても、ベテランの人に聞けば
すぐ教えてくれるとか、そんな形でみんなでカバ
ーし合いながら1人1人も働いているみたいな形
がとれるんですけど、自宅で請け負ってるみたい
な形になるとそれができなくなってしまう。だ
から、出てきた結果だけで全てが判断されると
いう、そうすると次に間違いなく起きるのは、そ
のテレワークをやってる人たちを正規雇用をする
必要はないということ。だから、そこに新しい非
正規雇用が発生しかねないということと、さら
には、それが起きてくれば、そこを請け負う会
社が出てくるっていいですか、だから1社だけ
じゃなくて数社のこういう業務を請け負いま
すというそんな感じです。

そうすると企業からすれば、自分たちの会
社の機密情報的なものが絶対外に流れない
という保証を出してもらえれば、そのほう
が安ければいいということにもなりかねない
わけです。だから、今の事務労働的な分野
がどんどんそういうふうな外部派遣会社
の仕事になったり、あるいは外部請負
会社の仕事になったりしながら、そこ
に非正規雇用の低賃金労働社会が拡大
していくという、その可能性というの
は極めて高いんですね。そういう危
険性のある程度頭に入れながらテレ
ワークも見えていかないと、自分で
気がついたら首が絞まったという
可能性があります。

だからテレワークで最初やって割にうま
くいったのは、やはりソフト開発の
プログラマーたちといますか、シ
ステムエンジニアたちですね、あ
の人たちはもともと請負的なん
ですよ。あるシステムを請け負
って、それで社員ではあるけれど
もそれができあがるまで、大き
なシステムか小さいシステムか
によりますけども、数カ月とか
ときには数年ということもあり
ますけど、その間1人

もしくはチームを組んでずっと
やっているっていう、だからそこ
で請け負ってるわけですね。だ
から、その形の人たちが会社
に来なくていいよというのは、
基本的にはパソコンがあれば
できる仕事ですから、だから
それはうまくいってしまった
んです。

それから、もともからいろんな
取引のトレーダーたちという
のも請負的で、自分が動か
せるお金が例えば10億円
とか、今までの業績に従
って、それで取引を繰返
して、取引も株の取引
から、原油の取引から、
金の取引からいっばい
ありますけども、それで
その自分の分野の取引
をやりながら成果を出
していけば、翌年の年
俸は跳ね上がるし、そ
れから動かせるお金
も大きくなるし、逆
にちっとも利益が上
がらないって話にな
ると辞めてくれとい
う話になるという、
そういうことなんです
けど、ここももとも
から請負的なんです
ね。だから、もとも
から仕事を請負的に
やってる分野では、
出勤しないでい
い分業になったとい
うそんな言い方も
できますけれども、
それが一般的な
いろんな労働に
広がって
いってしまうと、
さっき言った
ような、むしろ
私たち、もっと
質の悪い労働
社会をつくる
ことにな
ってしまう
ということです。

つまり、ともに働くという協働
という部分がど
んな形であれ縮
小すれば、人間
たちは使い捨
ての対象にな
ってしまうとい
う。実際には、
この後もし
テレワークな
んかがしっか
り定着して
いくと仮定
すれば、テレ
ワークでき
ない労働と
テレワーク
しても構
わない労働
みたいな、
そういう
労働の二
極分化が
進むだろ
うという
気がしま
す。とい
うのは、
企画をつ
くったり
していく
ような
仕事とい
うのは
テレワーク
では無理
なんです
ね。やっ
ぱりこ
れは人と
会ったり、
それから
みんなが
持つて
る情報
を提供
し合っ
たり、
そうい
うふう
にして
一種の
話し合
い、協
業的な
形、そ
うい
うもの
を持っ
てい
かない
と新し
い発想
なんか
出でこ
ない。だ
からそ
うす
ると、
そこ
がエリ
ート
労働
化して、
それで
それは
少数
でよく
て、そ
れで
圧倒
的
多
く
の
人
た
ち
は
い
つ
で
も
切
り
捨
て
オ
ー
ケ
ー
な
縁
辺
労
働
化
す
る
と
い
う
、
そ
う
い
う
ふ
う
な
分
断
を
こ
の
今
の
リ
モ
ー
ト
社
会
と
い
う
の
は
つ
く
り
か
ね
ない
とい
う
こ
と
で
す
ね。だ

から、新しいそういう形で労働の質の低下と分断化が進むという、その辺の可能性についても用心深く私たち見ておかないと、気がついたらこんなことになると思わなかったという話になりかねないということです。

だから結局、ここでも大事なことというのは、労働というのは個人が請け負うんじゃなくて、やっぱり結びつきの中でやっていくんだという、だから例えば1人で畑を耕してる農民でさえ、その中には自然との結びつきがあるし、それから農家の場合には家族総出で別に仕事をしなくてもやっぱり家族的なバックアップが後ろにあって、それで1人の農民は畑を耕してるという形になるし、そしてそこには村があったり、本来で言えば農協なんかもあったりして、それでつまりいろんな結びつきが背後にあって、そこに支えてもらって、最後は自然と結びつきながら、まあ今くわを持って働いてるという時代でもないですけども、1人が畑の上で働いているという格好になっていくわけで、それをあらゆる結びつきが全部切り捨てられてしまった状態で、1人だけで畑の上に立っているという形になれば、農業だって成立しないというふうに言ってもいいです。だからあらゆるものはそういう結びつきがあってこそ成り立っているんだということをきちっと見なければいけないし、そうするとステイホームとか自粛というのはほんとによくないやり方ですね。

つまり人間たちを分断して、全て個人の中に閉



じこもらせるという政策になっちゃうわけで、但し、最初から言ってるとおおり、爆発的に感染が拡大したりするときにはちょっとみんなしてこれやってみましょうということを別にやらざるを得ないかもしれない。だけど、自粛するんだったら、やっぱりある種の関係が細くなってしまうわけですから、ほかの関係は太くするというのを考えなきゃいけないわけで、そうすると自分としてはどういう関係を太くできるかですね。そのために高知県でしたら、山もあれば川もあれば海もある、しかも比較的至近距離のところにあるというそういう社会ですから、場合によったら自然との関係を太くするとか、それでもいいし、だからどういう形で関係を太くして、それで細くならざるを得ない部分を補うかという、そのことをむしろ真剣に考えなければいけません。

そうすると、そういうやり方というのは、またこれ地域地域によって違うので、ほんとにその点では高知なんてうらやましい限りの場所だということがいえますし、逆に東京の真ん中なんかにいますと、どこ見たって畑なんかなし、泳げるような海はないっていうそういうような地域です。ならば東京みたいな場所で、どういう関係なら太くできるのかというのを真剣に考えなきゃいけないんです。だからそのことを呼びかけなければいけないのに、つまりどうしても自粛せざるを得ないから、そしたらその分関係細くなりますよと。そしたら、それぞれがちょっとどういうところは逆に太くできるか、それぞれ工夫しましょうという、その呼びかけのほうをむしろしなければいけないということなんですけども、ほんとに閉じこもった人間たちをもう東京なんかいっぱいつくっちゃってるという、そういう感じですね。

だから、そういういろんな意味で私たちこれから、現代社会の持つ弱点をやっぱり克服するというのを考えなければいけないです。まずそのときに課題に置かなければいけないのは、私たちはともに生きる社会を守るんだという、あるいはより強くこれからつくっていくんだという、そのともにある社会という部分をしっかり目標に掲げなければいけない。そしてまたそういう中で今の政治権力、つまり自民党政権がいいか悪いとか

いう話だけじゃなくて、今の政治権力のあり方みたいなものがこれでいいのかという、そういうのもやっぱり検討しないと、危機になるたびにピント外れのことが行われるのでは、この社会ほんとに脆弱だといわざるを得ないです。

権力のあり方 ～中央集権社会の悲劇

僕は、近代国家というのは、入り口で失敗したと思ってるわけですね。というのは1789年にフランスでフランス革命があった。それで王政が一遍打倒されて、それで共和政に移行したということなんですけど、あのときの大失敗は、その前の王政は、ルイ16世とかそういう時代ですけども、あれは歴史の中では一番中央集権化した時代なんです。その前というのは日本の封建時代みたいなもので、各領主がかなり力を持っていて、それで日本でも江戸幕府が一番力を持ってるといいながら、江戸幕府は別に土佐藩の中まで入ってくるわけじゃないっていいですか、だから高知の山内家は徳川家に従属してるような形でもあるけれども、ここに戻っちゃえばここはおれの国だというような、そういうことでもあったわけです。

それがだんだんそういう領主権力が弱体化されて中央権力に一元化していくっていう、それが極限まで進行してきたのがフランス革命の前夜であったというふうにも言ってもよっていいですか、そのときに民衆による革命が起きて、だから本来でいうと、あのときに中央権力というのは何をやる権力なのかと、せいぜい中央と地方というのはどういう関係であるべきなのかとか、そういう権力のありようというものを再検討しなければいけなかったということなんです。だけど、あのときのムードの中では、それまで王様が持ってた強い権力を今度は人民のために使うんだと、人民のために使えばその強大な権力が非常に有効に使えるという、はっきり言えばそういう発想に立ってしまったということですね。だから、権力のありようそのものについて何ら検討がされなかった。だから王権、王様が権力を持っているその構造は

問題にしたけども、中央権力のありようとか地方権力のありようとか、そういうようなものについて検討されないままに行ってしまったということですね。

だから、フランス革命でもフランス革命が起きた後、今度はナポレオン帝政が復活するということになっちゃって、しかもナポレオン帝政はクーデターでやったわけじゃなくて、国民投票で王様になった初めての人は。だから共和政を使って、みんなが王様待望論をやったということです。だから、その中央権力の強大な権力というのはそのままにされてますから、いい王様にやってもらえば良くなるという、そういう話になっちゃったってことです。だから、ナポレオンが良かったか悪かったかの話は政治学者にでもやってもらうことにして、言えることはこういう中央権力のありようで良かったんですかということですね。

それは、だからソ連の失敗でもあるわけで、ソ連の場合だって崩壊することになってしまえばこんな社会だったのって話ですけど、ソ連をつくっていったとき、そのときのやっぱり気持ちとしては、例えばレーニンが悪質なことを考えてたわけでは全くないわけで、やっぱりみんなのためにいい社会つくろうとしたっていう、それは間違いなっていないですか、いい社会つくするためには中央が絶対的な権限を持って、それで中央がもう隅々まで動かすっていいですか、そのことによってスピードを持っていい社会をつくるっていう、それが社会主義社会へ行く道っていうそういう気持ちだったっていいですか、だけど結局ソ連が限界を示しちゃったのは、中央が全権を持ちすぎたっていう、そのために中央のイエスマンのような形でしか人々が生きていけないという、そういう社会をつくっちゃって、瓦解をしたということなんです。

僕、ソ連とか東欧が崩壊する半年ぐらい前だったかな、ドイツで汽車に乗ったらば通路にパンが散乱してるんですね。それで、つまり食べかけのパンがいっぱいそこら辺に投げ捨てられているっていう、だから歩くときほんとパンをよけながら歩かなきゃいけないっていうぐらいたくさん散乱してる。それで不思議な光景だなと思って、普通

どこの国でもやっぱり食べ物をそのまま裸で地面にぼんぼん捨てるっていうのは、余り品のいいことではないっていうのは、大体どこの国でもそういう同じ考え方ですから、それが1個2個おこっっちゃったんじゃないくて、ほんとに場所によたら床が見えないぐらいたくさんおこってるわけですね。それで何でこんなことになってるのか分からなくて、乗ってる人で話が通じそうな人がいたもんだから、何でこういうパンが散乱した電車なんですかって言ったら、この電車はどこから来たか知らなかったって言うから、知らないって言ったら、ワルシヤワ発って言うんですね。ワルシヤワ発ですと、だから今ポーランドから来る電車はみんなこんなもんですって言うんですね。

どういことかと言うと、ポーランドの政権が倒れる前なんですけども、その当時の社会主義圏って基礎的な食べ物すごく安いですよね。だからパンでいうと、これぐらいのパンが1つ今でいうと10円とか20円とかですね、それぐらい安い。つまり人々にちゃんと食料を届けなきゃいけないですから、それをやっていると今度、安いもんだから人々がそれを大事に食べないんですね。それでちょっと食べて終わったらポイっていう、つまり10円で買えるんだからまた買えばいいっていう、そんな感じです。ところがそのために国はパンの

増産に次ぐ増産をしなければいけなかったと。それは結果としては、非常にまずいパンを出回らせることになってしまった。それで、こんなまずいもの食べるかという人民の怒りが爆発していくっていう、そういう構図なんですね。

そうすると、こんなまずいパン食べるかという、かじっちゃあ捨ててく人たちっていうのは、人民も人民だなという感じがしてきますけれども、でもこれは人民を非難するっていう問題じゃなくて、ここまで中央集権化した社会の末路であるというですね、つまりパンまでが中央集権のもとにあるって、そして人々の権限がない。だから、自分たちの社会をつくってない、つくることができない。だから、与えられたものに対して、そういう形で人々が対応するようになってしまったっていう。これ実はもう東欧が崩壊していく過程では、どこの国でも起きてた問題なんです。

いろんな国で起きていました。だからルーマニアなんかでは、みんなが電気を節約しないからそのために停電が起きたりして、国が全く使わないときには電気切ってくださいって一生懸命やるんだけども、それで電気の統制が始まったっていうんで怒りが爆発するというこんな感じなんですけど。それは電気代がべらぼうに安い、だから電気を節約する理由が人民の側にないという、だけど



根本的なのはそういう問題じゃなくて、あらゆることを中央が決定していて、それでその提供をされたものを受け取る権限しか人民の側にないという、こういう社会がもたらした悲劇っていうふうに思ってもいいって思います。

そういうものの原型をつくったのが、ある意味ではフランス革命だったといってもよいと思いますか、つまり中央が絶対権力を持つというこの形ですね。本来からいうと、僕は逆にすべきだったと思っていて、地方が全権を持つという、むしろそれが原則ですっていうことを言えるような社会をつくらなければいけないと思ってるんです。だから今の市町村のままでいいかどうかは分かりませんが、つまりはっきり言ってしまえば、今の市町村が外交防衛から全権限を持つと、しかしそうすると市町村参っちゃうわけで、外交までやるんですかって話に当然なります。だからそういった結果として、自分たちでやるのは無理っていうことについては、その権限を上委託するといいですね。

そうすると例えば県に委託すると、だけど外交防衛ってことになれば、県も独自でやるというのは非常に大変ですから、そしたら今度は県が国に委託するという。だから全権は市町村側であって、こういう権限は県に委託しますと。県が独自にやるのも無理だったら国に委託します。だけどこれ委託ですから、委託した人は委託先を絶えず監視するというそういう仕組みでなければいけなくて、それで意に沿わないことをやったんだらばいつでも委託を中止しますという、それをやる権利を持つということですね。

そうすると、とりあえずは多分今と余り変わらないでしょうと。つまりそんな市町村、何でも権限を持ってやっていけませんから、大抵のものは県に委託され、県もそれは困ったって国に委託してっていう、だから余り変わらない感じはしますが、これをやっていくと少しずつ、あっ、これは委託しなくてもよかったんだというのが必ず出てきます。それは例えば医療制度とか、それから社会保障制度とか、それから地域福祉制度とかですね、それは地域によって地域のあり方違いますから、これは全部委託しないで、この地

域独特の方法をうちやりますとか、そういうふうな市町村が出てきてもいいし、あるいは県としても、例えば高知県は東京と同じ方式でやらなかったっていいでしょうっていう、そういう部分が出てきてもいいし。

さらにいえば、その方式でやるとひょっとすると沖縄県あたりは、外交防衛の一部については国に委託しないっていう可能性が出てくるわけで、それを認めてこそほんとに地方自治なんで、ですから、それで国が嫌だって言うんだらば、ちゃんと沖縄を説得するだけの言葉と政策と財源とかですね、いろんなものをちゃんと持って、それで悪いけど委託してくれませんかとお願いくるっていう、そういうことであるべきなんであって、今のように、辺野古のように上から国が決定したんだってって、従わない沖縄が悪いみたいな、そういうことではないんですよということが始まるってことです。

だから本来から言うと、その小さい単位が全権を持ち、自分たちができないことは上に委託すると。だけど、委託先がちゃんとやってくれるかどうかについては絶えずチェックするという、そういうふうな政治権力のあり方というのを、これからほんとに真剣に考えていくべきなんじゃないかなというふうに思ってます。

閉じられた空間から 開かれた空間へ

私たちというのは、政治のあり方、権力のあり方みたいなものをこれから検討し直す必要があります。政治のあり方って、言ってしまうと例えば自民党なのか新立憲民主党なのかとかそういう話に行きかねないんだけど、ちょっとその前にそもそも権力ってこういう形でいいのっていう、その問題から検討し直さなければいけないという気がいたします。それからあと、やはりこう我々は関係の中で生きているんだから、そうするとある種の関係が細くなるんならば、別の関係を太くするというようなことも先ほど言ったように考えなければいけないし、それでその関係の集約点に結集

する場所があるわけで、そうするとそれは確かに今この部屋超満員にして、ちょっと話やりましょうというわけにも行きにくい状況であることは確かです。

そうすると現代的な結集の仕方ですね、それはどうあったらいいかと。そこではこの程度の結集にしといて、その代わりネットで配信するとか、そういうことももちろん考えてよいし、実際僕自身のグループもそういう方法をかなり使ってます。だけど、結集のあり方というものをやっぱり真剣に考えるべきだし、結集が悪だというようなこれはいけないんで、どういう結集ができるのかということをもしろ真剣に考えなきゃいけないし、そういう中でこの社会をどう開いていくのかということなんです。

気がついてみると、欧米でもそうですけど、死者が大量に出ているのはもう圧倒的に高齢者関連の施設なんですよ。高齢者が重症化しやすいというのはよく言われてるんですけど、僕自身は、高齢者が重症化しやすいのか、高齢者は薬を飲み過ぎてから重症化しやすいのか、どっちかなとは思ってるんですけど、特に今もう高齢者の常備薬と化した日本では血圧降下剤とか、あんな免疫を低下させるようなものをみんなして飲んでるわけですから、それは感染したらひどくなりますよねっていう、だからどっちかなとは思ってるんですけど。

だけど何はともあれ、高齢者施設なんかでも結局閉じられた施設なんですよ。そこの中に、閉じられた中にウイルスが入っちゃうと、あっという間にちょっとひどいことになっちゃうとか、障害者施設とも同じで、それが閉じられた施設になっていて、さらに言えば病院がまた閉じられた施設になっていて、そこに菌が入ったりするとえらいことが起きると。そうすると、むしろこれからは開かれた病院の形とか、開かれた高齢者施設の形とか、開かれた障害者施設の形とか、それどうい

うふうにしたらほんとに開かれたものといえるのかという、そっちのほうをこれから長期的には検討しないといけないなという気はします。

だから、とりあえずはそういうところに菌が入らないように、ちょっと逆に閉じていくということをしざるを得ないにしても、長期的にはやっぱり閉じられた空間が感染を広げるといのが、これ欧米でもはっきりしてきているので、やはりそういうところの開き方というのをまじめに考えなきゃいけないし、それで開いていこうとすると、結局プロの人たちとセミプロの人たちとアマチュアの人たちが結び合えるようなありようというのを考えなきゃいけなくて、だから医療でもそういういろんな施設でもそうですけども、そのプロの人たちがいて、それで多少いろんなことを知ってるし、身にもつけてるけれども、それを仕事にしているわけではないというセミプロぐらいの人たちがいて、さらにはよく分かりませんというアマチュアの人たちがいて、でもその人たちが協力し合える体制といいますか、それが多分開いていくということの意味だと思うんですね。

だから、プロだけで独占するのは絶対いけないし、それからアマチュアが協力できないような体制をつくるのも良くないし、そういうことも含めてこれからともに生きる、ともに暮らすには、どういうふうな社会をつくり、どういうふうな労働体系をつくりやっていったらいいのかという、それをやっぱりこちら側から提案できるような力をこっちがつけていかないと、ほんとに今度のコロナではっきりしたことは、私たちの社会はファシズムに弱いという、それを嘆いているだけでは残念ですから、やはりそれを超えていけるようなものをこれからちょっと時間かかっても、みんなしていろんな形で議論したりしながら、見つけていかなければいけないというふうに思っています。

これで話を終わりにいたします。どうぞご静聴ありがとうございました。

(司会)

内山先生、ありがとうございます。せっかくの機会なので、ご質問等ある方おいでますでしょうか。

(会場)

お話ありがとうございます。1点だけちょっとお聞きしたいんですけど、私たち3.11経験して、そのときに国の政府のほうで、計画停電とかもしくは直ちに人体に影響はないとか、本来であれば3ミリシーベルトであったものが年間20ミリシーベルトで構わないという、その頃でも、そのときも何となく統制的なものを感じた記憶があるんですけども、それと今回のコロナとを比べてみて、やはりあのときのほうがもう少しきつかったかなというような記憶があって、今回のほうは人間関係が、人間が持つてそのものの根源的な差別的な要素というのが思いっきり表に出てしまったというような感じがして、すごいコロナ禍というのは、人間の問題を浮き彫りにしてしまったというような感じがしてますけど、先生、どんなご意見でしょうか。

(内山氏)

3.11のときには、政府のほうに相当の危機感があったことは確かです。ただ、あれ以上の対策ができなかったというふうに思ってもいいです。というのは、本当に安全を考える、つまり少しでも不安があるものはこの際除いていくということだ



と、ほとんど関東全域を避難させなきゃいけなかったわけですね。そうすると、東京首都圏全員避難ということが現実問題としてできるかというですね、そうすると、残念ながらこういう都市形成をしてしまっているとそれが不可能であるということで、それでかなり濃度の強い地域だけが避難地域みたいになっていくということであったわけです。

その後、東京でも濃度がどんどん下がったということもあって、これぐらいだったらまあがまんできる範囲じゃないのというようなぐらいにはなっていくんですけども、ただ、放射能問題というのはこれもまたよく分からない問題が必ずありますし、それからあと個人差の問題があるので、例えば僕は大丈夫だけどこっちの方はそれでもう被爆しちゃうとか、そういうことも起きてしまいますんで、ほんとにそういう点でよく分からないです。

僕の知りあい僕よりもちょっと年上の人なんですけど、彼は今もう90近いです。その方はお医者さんなんですけど、広島で被爆してるんですね。だから被爆手帳も持つてるんですけど、元気にお医者さんやってるわけです。ところがそのときに一緒に遊んでいた弟さんは20歳ぐらいで白血病が発症して亡くなってるんですね。それで原因は原爆による被爆。

けど、そのお兄さんにあたる人が言うんですけども、ほとんど同じところにいたと。それでしかも兄弟だから、多少の違いはあるにしても遺伝子的にも相当似たようなもの、それであと食生活とかも一緒だから、自分はいいい食生活で向こうは粗末だったとかいうこともないという。それなのに自分はまだ元気でいて、弟は亡くなったという、この差が何なのかさっぱり分からないという。

だから、放射能問題というのはこういう問題が起きるので、だからほんとに分からない。ただ、分からない中で、あのときというのは、あれぐらいしかやりようがなかったんだろうという感じではあります。

僕は数日後に福島のある村で講演会が用意されていて、多分極めて小さな講演会になると思いますけども、そこは全員退去を求められた村です。

今、村にもう戻ってきてもいいよというふうになっているので、村民は続々戻ってきてると言いたいところなんですけど、4,000人ぐらいいた村が今戻ってきてるのが400人ちょっとです。そのうちの400人ぐらいは高齢者で、もう仮に被爆しても自分も歳だしというような、それで最後は自分の村で暮らして死にたいという、そういう人たちが400人ぐらい戻ってきています。それで若者といえるのは3、4人しかいない。この状態でこの村復活できるんですかという、その若者たちが企画してる講演会なんですけど、僕としてもかなりつらい講演会です。そこに行って何か頑張っただけとか言うわけにもいかないしっていうんで、ほんとに大変なんですけど。

だから結局、時間の経緯とともに、そういう形であの福島問題というのは結局人々が審判したということなんです。だから、政府がどうこうはともかくとして、やはり原発とは共存できないということを人々が選択してるということでもあるわけで、だからそれが今ほんとに地域の復興とともに目立ってきたっていう、だから津波のほうの地域はまだどんどん復興してるんですね。やっぱ

りかなり人口は流出してますけれども、だけど、原発のほうはほんとに大変ですっていうそういう状況ですね。

だからそういう中で起きた事故だったけど、今度のコロナについて言うと、ほんとにもっと質が悪く、上からの統制がかかり、下からの統制がかかり、専門家やキャスターやアナウンサーが暗躍してみたいな、ほんとに今度はファシズムだなんていう。だから原発のときには、あれが最良だったんだろうかという、そういう問いかけで済むような気がします。だけど今回は最良を乗り越えて、この社会の持つてるやばい面をさらけ出してきたという、そういう気がしてるという感じですね。

(司会)

ありがとうございます。貴重なお話いただいた内山先生に、再度全体の拍手でお礼に代えたいと思います。どうもありがとうございました。それでは、以上をもちまして、本日のセミナーを終了したいと思います。本日はご参加いただき、またオンラインでのご視聴もいただきました。ありがとうございました。

